

---

# トリガーロック

桜月弥生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トリガーロック

### 【Nコード】

N7714I

### 【作者名】

桜月弥生

### 【あらすじ】

6千年前から数百年おきに誕生する化け物・トリガーロック。

その身体能力は一般人をはるかにこえ、一人で軍隊相手に三日三晩戦えるとも言われている。

生まれる原因も不明。その圧倒的な戦闘力の根源も不明。

すべてが謎に包まれたトリガーロックだが、その力の前で人々は従うしか無かったという。

そうしてどういわけか何千万分の一という確率でトリガーロックとして育った鳥呀は、人々に化け物として恐れられ、腫れ物のよう

に扱われてきた。

生まれ故郷を奪われ、すべてを破壊された過去を持つ鳥呀は復讐を誓う。

しかしそうしている間にも新たな敵が現れ……！？（という感じの、アクション系のノベルを目指してます。ていうか、作者は中二病？）

## 第一話 悪夢と現実

古ぼけた孤児院の窓から、二人の子供が顔をのぞかせていた。彼らの表情は興奮を隠しきれず、目の前に広がる祭りの騒ぎを食い入るよう見つめていた。

孤児院の前には広い、円の形をした池がある。

その池の縁をなぞるように道が造られ、そこから街の面積がどんどんと拡大していったのがここ、エイズプラザの街である。

いわば、この池こそがエイズプラザの核なのだ。

毎年、エイズプラザではこの池を祝福してお祭りが開催される。

人々は舞踏会の仮面をつけて踊ったり、屋台でお菓子を買ったりと本当に楽しそうだ。

夜空には花火が舞い、エイズプラザには子供達の歓声や楽しそうな声が響いていた。

「先生がね、後で私たちも一時間だけ参加していいってさ」

窓から顔をのぞかせていた少女が、隣の少年の顔を見ながら興奮を抑えるようにつぶやく。

その姿に少年は微笑を浮かべると、ふいに悲しそうな顔をした。

「……………俺は、今日はいいや……………。体調優れないし」

「……………鳥呀！もしかしてまた逃げる気!？」

鳥呀とろがと呼ばれた少年は、少女の突然の大声に驚く。

少女は口をきつく結び、両手を腰に当て、鳥呀を睨んだ。

「だ、だって俺が行っちゃうとみんな怖がって、その……………、祭りの雰囲気壊すというか……………」

鳥呀はおどとした表情で少女を見上げた。少女は「ふん」と鼻で笑い、鳥呀に説教する。

「あんたがね、そうやって逃げ腰にいるから誰も近寄ろうとしないし、あんたの事を誤解したままでいるのよ。それにこの喧噪の中、誰もあんたがトリガーロックだって気付かないわよ」

ずしん、と鳥呀の心に何かが重く響いた。

……トリガーロック……化け物……。

胸に鋭い痛みが走る。閃光のように頭に浮かぶ人々の恐怖に満ちた表情。

はたして自分は存在すべきなのだろうかという疑問が、頭を渦巻いた。

けど、この少女……ユリがいるなら、ユリが俺を支えてくれるなら、と鳥呀は顔をあげた。

ユリが手を差し伸べてきた。

鳥呀はしっかりと、その手を握り返す。

そしてその時だった。

空から大量の炎の塊が降ってきたのは……。

「……っ！」

声にならぬ悲鳴をあげて鳥呀は跳ね起きた。

素早くあたりを見回す。

壁。見慣れた、自室の壁。

「……………」

鳥呀は深いため息をつくど、ベッドから降りた。

「まだだ。またあの夢だ。11歳の頃の、つまり5年前の、最悪な思い出。」

いつからだろう、それが夢となって鳥呀を苦しめ始めたのは。

まだ完全に頭の覚めないまま、鳥呀は朝の支度を始めた。

「あんたは、まああたしランクうううう！？」

ギルド内に紗香の怒鳴り声が響き渡る。

「なんであんたは毎回、危険な任務ばつか選ぶの！？特に今日なんて、盗賊退治だよ盗賊退治！しかも国境近くの巨大勢力組織！」

「こんな私たち二人じゃ無理じゃないのよおおお！」

紗香は拳を二つ作ると、鳥呀の頭にぐりぐりと押し付けた。

鳥呀はその拳を少し強めに払いのけ、任務の詳細な説明の書かれた書類をバンバンと叩く。

「大丈夫だつて！お前はただサポートをするだけでいいから。なっつ？」

「なっつ？じゃないわよ！あんたとペアを組んで5年経つけど、いーちーどーも安全の保証された任務、こなしてないのよ！」

さすがに16歳の少女的にも、殺すか殺されるかの任務はこりこりらしい。

ていうか、年齢性別関係ないか。  
けど、Dランク程度の農業の手伝いとか工事現場の助っ人に関しては、やる気は全くない。  
Fランクなんて論外だ。  
そもそも自分はあるトリガーロックなのだ。  
紗香は少しばかりのサポートをすればいいだけなのに、一体何がそんなに嫌なのか。

「ほう、また君たちは揉めているのかね」

二人の揉めていたギルドのカウンターの奥から、マスターが現れた。白いひげを足下まで垂らした老人は、まるで仙人のようなオーラを放っている。

「マスター、こいつが危険な任務しか選ばないんです！」

紗香はすがりつくようにマスターを見つめた。

だが肝心のマスターはうむむとうなずくと、優しい声で言った。

「頼城さん、千葉くんはあなたの上司じゃよ？ 反抗的な態度はいかんぞ。それに君はまだ兵士ランクじゃろ？ 千葉くんのように騎士ランクに上がるには、経験がいるぞ」

頼城、つまり紗香は悔しそくに唇を噛むと、小さな声で「……わかりました」と呟く。

マスターの言葉は絶対だ。

「盗賊は国境近くに拠点を持つ。どうやら盗賊の頭はかなりの戦闘経験をつんでいるようじゃ。出発は明日にし、電車で国境近くまで向かいなさい」

鳥呀と紗香は同時にうなずいた。

鳥呀は紗香とギルドの前で解散すると、自宅へと歩いた。

明日はSランクの任務があるので、マスターがはやめに帰宅してもいいと配慮してくれたのだ。

鳥呀は自分の住む町を歩きながら見回した。夜空には巨大な野生の大カラスが飛行していた。

ここ、ラーロンドは首都である。そのため、近代的な建物が多く並んでいるのだ。

道は石畳で出来、街灯はくねくねと変わった形をしている。

多くの人が移動する大通りに、ところどころ大トカゲや小さなドラゴンを引っぱる商人の姿も見えた。

その奇抜な光景は観光客にも浮け、もはや一種のパフォーマンスとなっていた。

まだ魔法と近代技術の渦巻くこの時代、魔法やドラゴンは大して珍しくないが、それが町中で堂々と公開されている事に観光客は一種の滑稽を感じるのだ。

鳥呀が歩いていると、一人の酔っぱらいがぶつかってきた。

向こうから接触したくせに、やたら挑発するような態度で鳥呀を睨む。

「おいごら、ちゃんと前を向いて歩けや。どういつ教育受けてんだ

? あん?」

鳥呀はぺこっと頭を下げると「すいません」と謝罪した。



こういう輩は張り合うより、素直に謝罪した方がうまくいくのだ。が、どうやら酔っぱらいは怒りが収まらないようで、鳥呀を突き飛ばした。

「その程度の謝罪で、俺が許してやるとでも思っただけか!？」

拳を振り上げ、にやにやしながら鳥呀を殴ろうとする。

が、鳥呀にとってはその挑発は恐ろしくも何ともなかった。平然と拳が振り下ろされるのを待つ。

しかし突然、そばを離れていた男の友人が男の名前を叫んだ。慌てた様子で友人は酔っぱらいを押さえ、怒鳴る。

「お、おまえ！ 誰を相手にしてんだ！」

「なんだよおめえまで。ぶつかってきたのはこいつだろうが」

「違う！ こいつは……」

酔っぱらいが濁った目で鳥呀を見た。そしてその目が大きく見開く。鳥呀を差した指がプルプルと震えていた。男の額に汗が垂れる。

鳥呀の胸にずきんと鋭い痛みが走る。その痛みは、いままで何度も経験したはずだが、慣れたことはなかった。

またか、と胸に絶望が響いた。一体、幾度この冷たい感触を経験すればいいのだ？

「……トリガーロック………化け物………」

さっきまでの怒りはどこへやら、酔っぱらいが震えながら頭を下げる。

「すみませんでしたあ！ さ、酒を飲み過ぎて、どなたか気付きませんでした！」

男の大声で、周囲の人も異変に気付いた。そして鳥呀の顔を見てはつとした表情をし、ひそひそと会話する。中には子供を連れて人垣から抜け出す母親もいた。

「……何もしませんから、放っておいてください」

鳥呀は冷たく言い放つと、人の密集する大通りからずりりと出て、裏通りを歩き始めた。

後ろの人垣からはざわざわと声が聞こえる。おそらく鳥呀の話をしているのであろう。

鳥呀はため息をつくと、荒々しく裏通りを歩く。

6千年前から数百年おきに誕生する化け物・トリガーロック。

その身体能力は一般人をはるかにこえ、一人で軍隊相手に三日三晩戦えるとも言われている。

生まれる原因も不明。その圧倒的な戦闘力の根源も不明。

すべてが謎に包まれたトリガーロックだが、その力の前で人々は従うしか無かったという。

そうしてどういうわけか、何千万分の一という確率でトリガーロックとして育った鳥呀は、人々に化け物として恐れられ、腫れ物のように扱われてきた。

頭に浮かぶのは、あの孤児院から見た祭りの様子と、隣の少女。鳥呀は目をつむると、拳をきつく握った。

「……いつか、必ず殺してみせる……」

鳥呀のつぶやきは、夜空に吸い込まれるようにして消えた。

急にあらゆる音が消え去ったのは、お祭りのピークの時であった。池のまわりで踊り、歌い、騒いでいたエイスプラザの住民達はそのあまりにも不思議な光景に動きを止めていた。演奏をしていたオーケストラやバンドさえも、演奏を止め、呆然と空を見上げる。

きらめくような夜空から、炎の塊がまっすぐに池に落ち、池に浮かんでいた大きな木の破片にあたったのだ。

その塊は一見火の玉にも見えたが、重力に逆らうようにゆったりと落ちた事から、ただの火ではない事は一目瞭然だった。

木の破片はあっという間に燃え、周囲の暗い池の水面が赤く染まる。

そして、木の破片は燃え尽きた。

住民達は空を見上げるが、炎の塊を落とすようなものはどこにもない。

首を傾げる住民達の前で、さらなる衝撃が起こった。

空からいくつもの炎の塊が降り注いできたのだ。

住民達は呆気にとらえて動かない。

そして、一人の青年が叫んだ。

「逃げる！」

その瞬間、無数の炎の魂が激突し、建物の屋根を燃やした。

住民達は眠りから覚めたかのように困惑した。

原因不明の炎の魂は降り続け、家を燃やし、人にあたり、道に激突した。

至るところで聞こえる住民達の悲鳴 - - 悲鳴 - - 悲鳴。

他の住民達と同じように、鳥呀もようやく目を覚ます。

「な、何だよこれ！」

窓から見える景色は地獄絵図だった。

炎の塊はいつこうにやむ気配を見せず、次々と降り注ぐ。

小さなエイスプラザの街に密集していた建物を燃やし続ける。

煙が昇り龍のように夜空に舞い上がる。

そして鳥呀は聞いた。

街全体に聞こえるような大声を。

それは、外から聞こえてきた。

『姿を見せる！ トリガーロック！ この街を守りたいなら、外へでて私を止めてみよ！』

恐怖が、鳥呀の心を染めていく。

## 第一話 悪夢と現実（後書き）

三月生まれ。愛する三月を名前に使いました。名字、下の名前とも三月関連です。

これからもがんばり、必要ならば自分に鞭打ってなんとかやっつけていきたいと思います。

作者は違う意味で中二ですが、邪気眼は出ません！

## 第二話 天秤と決断

「……………ありえないんだけど……………」

後ろで紗香が呟いた。

鳥呀も紗香の落胆ぶりに合わせるようにため息をついた。

ここは国境近くの大草原だ。

ここに拠点を持つという盗賊を追い求めて、鳥呀達は電車でここまで来たのだが……………。

草原は、予想以上に広がった。

既に一時間は彷徨い歩いていくるが、盗賊の姿は見えない。

見渡す限り草、草、草の世界の中、鳥雅達の情けなさを祝福するよ  
うに太陽が輝いている。

雲一つない青空の下、鳥雅達とはたとと歩く。

「……………ていうか政府もさあ、任務頼むなら正確な情報教えろよお  
ーっっ！」

鳥呀は嘆くように叫んだ。

ひょっとして、この声を聞いた盗賊側が接触しにくるかもしれない。  
そんな渴望が鳥呀の心に渦巻いた。

そして、丁度その時だった。

遙か遠くに、人の集まりを見つけたのは。

「顔はよく見えねえが……間違いないな、ラーロンドのギルドだ」

男が微笑を浮かべて仲間達を見た。

果てしなく平らな草原、その地平線のあたりに人影が見えたのだ。

男は持ち前の視力で人影がギルドのパーカーを着用している事を確認したのだ。

「んで、どうする？ この草原じゃ、奇襲をするにも隠れる場所が無いぞ」

仲間の一人がナイフを研ぎながらつばを吐く。

近頃、ギルドの連中が男の所属する盗賊を殲滅しにくるという噂が広がっていた。

国境近くの住民はそれを望んでいるらしいが、男達にとっては大事な儲け場所がなくなるのは辛いのだ。

そこで盗賊の頭はスリーマンセル（三人一組）で見張りをするようと命令を下した。

そうして見張りをしていた男達であったが、偶然にもギルドのメンバーを発見したのが今だ。

「単純だよ、見た所あいつらはまだガキだ。多分戦闘をしに来たんじゃなくて、大方偵察タイプだろ。」

捕まえて人質にしよう」

仲間の一人が自信ありげな表情で背中  
の剣を取り出し、素振り  
を始めた。

「んじゃあ、行くか」

運動神経のいい男達は、真つ  
すぐに少年達の元へと走り出した。

「紗香、お前はそこで待ってろ」

鳥呀は軽く準備体操をすると、自分  
たちの元へと迫り来る三人の男  
を見た。

走り方から見て、戦闘慣れをして  
いるだろう。

「うん、そうする。戦うのは苦手  
だし」

紗香は構えていた短剣をしまいな  
おした。

鳥呀は頷き、時を待つ。

男達が近づいてくる。

その距離は70m、60mと着々と縮  
まる。

そして、鳥呀は走り出した。

人間離れした瞬発力で一気に男達  
の間合いに入り込む。  
男が嬉しそうな顔をする。



戦いが始まった。

一人目の男は剣を横になぎ払って来た。

鳥呀はバク転の要領で後ろに飛び、剣を回避する。

後ろに下がった鳥呀を右から違う男がナイフを片手に斬り掛かる。

鳥呀はナイフを持った男の手首を素早く掴み、思いつき握った。

握力とは思えない程の力が男の手首を折った。

男はギャツと叫ぶと、ナイフを取り落とす。

が、すぐに後ろから別の男が大剣を振り落とした。

ただの成人の男じゃ、あんな重い剣を持つ事さえ出来ないだろう。

やはり戦闘慣れしている。

鳥呀は右手の甲を思いつき大剣の側面にぶつける。

タイミングが少しでもずれていれば、鳥呀は今頃重傷を負っていただろう。

トリガーロックの力を思いつき受けた大剣は、そのまま右へ吹っ飛んだ。

が、大剣を失った男は臆する事無く、そのまま鳥呀の右腕を掴んで倒れ込む。

いくらトリガーロックとはいえ、いきなり成人の体重が右腕にかかるのとバランスをくずす。

そしてその隙をつくように、最初に攻撃して来た剣の男が鳥呀に襲いかかる。

鳥呀は右腕を掴む男の胸ぐらを握ると、そのまま思いつき男ごと持ち上げる。

そして閃光のような速さでその男を投げた。剣を持った男に。まるでボールのように。

二人の男は地面に激突し、もみくちやになった。

残された手首の折れた男は走って逃げ出そうとする。

鳥呀はナイフを拾うとびゅんと投げた。

ナイフは逃走する男の頬をかすめ、一条の血が頬から垂れた。

男はひいっと叫ぶと、腰を抜かしてへナへナと座り込む。

鳥呀はうんうんと幸せそうに頷くと、もみくちやになった二人と座ったまま震える男を雑に一カ所に集め、紗香が手渡したロープでくくった。

「やたら強いと思ったら、お前、トリガーロックかよ」

ロープで身動きのとれない男が嘲笑のこもった目で鳥呀を見た。

紗香は心配そうに鳥呀の顔を覗き込む。

「そんな事はどうでもいいから、とっととお前らのアジト、どこにあるか教えるよ」

鳥呀は不機嫌そうな顔で男達を蹴る。

さつきからこいつらは、お互いの顔を笑みを浮かべたままちらちらと見ているのだ。

まるで、本人達にしか分からない事を、本人達だけで楽しむかのよ

うに。

「まあいいぜ、教えてやるよ」

リーダーらしき男がにやにやしながらつばを吐いた。  
横に居る紗香が「きもっ」と呟く。

念を押すように、男はさらに口を動かす。

「その代わり、我を失って激昂するなよ？」

「なんなんださつきから。いい加減に殺すぞ」

脅すように紗香が短剣を突き出した。  
短剣が白く輝く。

「まあ聞けよ。アジトはここから北に一時間歩けばある。テントが  
たくさん張ってある場所だ」

男は我慢出来ずに笑い声を上げた。

鳥呀はイライラして男の髪を掴んだ。

「いい加減にしるよ。もうすぐ、俺がお前らのテントを全部燃やし  
て、必要ならばお前の仲間も殺すし、余裕があればお前の仲間を口  
ープでくくってブタ箱にぶち込んでやる。さあ言えよ、何がおかし  
い」

「俺たちの頭は、アマテラスだよ！ お前も知ってるだろ！？」

男が突然、叫んだ。

残りの男達が笑い転げる。

鳥呀は目の前が真っ白になった。

頭の中が完全な“無”で満たされる。

遙か遠くに紗香の音がする。

「あ、あんた達嘘をついてんじゃないわよ！」

「嘘じゃねえよ。この状況で嘘なんかつけるか」

心が痛む。

鋭い、刃物で斬りつけられたかのような痛みが体中に走る。

アマテラス。

鳥呀の生まれ故郷、エイズプラザを破壊した男。

急にはつきりと目の前がよく見えた。

空はいまだに青空で、草原は緑だ。

そして男達が鳥呀の顔を見て来た。

激しい、いままで体験した事の無い怒りが鳥呀を襲った。

それはうねり、捻れ、鳥呀の中で暴れた。

「鳥呀！」

紗香が叫んだ。

気付いたら鳥呀は全速力で走っていた。

北へ。

北へ。

千葉鳥呀という存在を苦しめた、あの男の元へ。

絶対に殺すと誓った、アマテラスの元へ。

### 第三話 観察者と復讐者

国境近くから遠く離れた、広大な砂漠。

その砂漠の砂の絨毯に不自然な穴が一つ存在していた。

穴の直径は巨大で、龍さえも余裕で入れるだろう。

地面に対して水平で、そのまま地下へと続いていた。

穴の中を進んでいくと、無限に広がる洞窟があった。

薄暗く、ほとんど何も見えないこの場所に、一人の男と“何か”が立っていた。

「ったく、こいつもまた失敗作かしんねえな……一般の男相手に、あの戦い方は無いわ」

男が足下の池を見つめていった。

池には本来映るべきではない物が映っていた。

国境近くの草原だ。少年が複数の男と戦っているのを、客観的に映している。

「ふん、辛抱強いな。6千年も待ったのだ。もうこの小僧で十分だろっ」

男の後ろの“何か”が不機嫌そうな声を漏らす。

“何か”は巨大だった。その薄暗い巨体の輪郭から、“何か”がただの生き物ではない事は安易に想像出来た。

“何か”は話し続けた。

「確認のために言うが、別に化け物の力をお前に転写しても、お前

の既に持っていた力に足されるだけだ。別に上書きされる訳ではないぞ？」

“何か”の声はどこか迫力を感じさせる低い男の声だった。

反対に男の声はどこにでもいそうな若い男の声だ。

男が薄笑いを含んだ声で言った。

「わかっているけどよお。だってコピー出来るのは一度きりだぜ？

今回のを自分にペーストしたら、次は無い。だからこいつの次の勝負で決めるわ」

「ほう………で、その次の勝負とは？」

「何て事はねえ。この小僧の復讐相手だよ」

男が“何か”の目を見つめて言った。

「アマテラスだ」

そして、その五年前。

『姿を見せる！ トリガーロック！ この街を守りたいなら、外へでて私を止めてみよ！』

孤児院の外から声が聞こえた。

鳥呀は取り憑かれたように部屋を飛び出した。  
その腕を少女・・・ユリが掴む。

「待つて！ 外に出たら、あの炎にあたって死んじゃう！」

「俺は化け物だよ！ そう簡単には死なない！」

鳥呀はその手を振り払うと、しっかりとした目でユリを見た。

「それに……この炎を降り注いでいる奴は、俺が欲しいんだ。俺さえ手に入れば、きっと攻撃は終わるんだ」

11歳の少年はそう確信していた。

ここ、エイズプラザの街を攻撃している奴は、鳥呀と戦いたいのだ。戦って、止めてみせると挑発しているのだ。

街が自分が原因で被害を受けているのに、自分だけ逃げている訳にはいかない。

「待つて！」

後ろでユリが叫ぶが、鳥呀は構わず走った。

扉を開け、廊下を走り、階段をジャンプする。

「避難しなさい！ 全員、ベッドの下へ！ 原因は分かりませんが、すぐに終わるはず！」

孤児院の先生が階段の踊り場に立って孤児達を誘導していた。

鳥呀は先生の脇をすりりと抜け、全速力で走る。

終わらせないと。



はやく終わらせないと。

もし自分が逃げたらどうなるか、鳥呀は考えた。外にいる奴は、鳥呀が欲しい。

鳥呀は姿を見せない限り、エイズプラザは壊滅。

人々は姿を見せなかった鳥呀を責め、ますます鳥呀は孤独になる。

それに鳥呀はこうも思っていた。自分は化け物だ。

この力を利用して、相手を退ける。すると街は救われる。

そうすれば、人々の鳥呀に対する考えも、少しは変わってくるんじゃないか、と。

これはもしか、神様が鳥呀に与えた最初で最後のチャンスかもしれない。

孤児院を出ると、そこは熱気で包まれた。

向かいの建物は全焼し、石畳がめくりあがっていた。

鳥呀は空を見上げると、大声で叫んだ。

「俺だよ！ 俺が、トリガーロックだよ！ ここにいるぞ！」

攻撃が、一瞬止まった。

鳥呀はそこで記憶をぶり返すのを止めた。

この話はまだ完結していない。

今からアマテラスを殺し、復讐を果たしたとき、初めて鳥呀は救われる。

わずかに。わずかにだけれど。

全速力で走った。

気配から見て、紗香は追って来ていないだろう。

地面がもの凄い勢いで後ろへ吹っ飛ぶ。

ダダダダという足音が、暗くなり始めた空の下で目立つ。

そして鳥呀は見た。

地平線の彼方に、テントが建ち並ぶ場所を。

「アマテラスはどこだアツ！」

鳥呀の怒鳴り声を聞いて、100個近く建てられていたテントから男達が顔を出した。

テントは等間隔に並べられており、幾人かの男は焚き火を燃やしていた。

「おいおい、いきなり現れて、人のボスを呼び捨てで呼んで、何様なんだよ坊ちゃん。おまけに……」

男の一人が鳥呀の服をまじまじを見つめる。

「ラーロンドのギルドからじゃねえか」

「これはギルドの任務と関係ない。本来ならお前ら全員を殺してる所だったが、今は興味ない。お前らのボスに会わせる」

鳥呀は怒りを込めた視線で男を見た。

男はやっと鳥呀が誰か気付いたようだ。

「おいお前ら！ ゲストだぜ！ なんと、俺たちのボスを一度倒した、あのトリガーロックだ！」

男が後ろを振り返って叫んだ。

テントから男達が飛び出し、何だ何だと騒ぎ始める。

「誰かボスを呼んで来てやれ。このトリガーロックが、ボスと会いたいってよ！」

別の男がにやにやしながら言う。

数人の男が奥の方のテントに向かって駆け出した。

鳥呀の周りでは何十人かの男が集まっていた。

物珍しそうに鳥呀をじろじろ見つめる。

そして、数人の男に連れられ、アマテラスが人垣をかきわけて鳥呀の前に現れた。

「ほう。これはこれは、久しぶりじゃないか。いやはや、何年ぶりかね」

脳が痺れる。  
腕が震える。

あの時と同じ格好で、アマテラスが立っていた。目の前に。微笑を浮かべて。

白のローブを羽織、紳士的な髭を指でいじるその姿は、5年前と一緒だった。

腰には刀をさしている。

透き通るような銀色の毛が、肩にかかっていた。

「俺の、俺の故郷をめちゃくちゃにしゃがって！」

鳥呀は叫ぶ。

怒りを引きちぎるように。

「アマテラス、お前に決闘を申し込む！ 今度こそ、確実に息の根を止めてみせるぞ！」

鳥呀は怒りで震えながら怒鳴る。

男達が歓声を上げた。

その歓声に応えるように、アマテラスが右手を挙げた。

「いいだろっ」

アマテラスの口から、そんな言葉がこぼれ出た。



### 第三話 観察者と復讐者（後書き）

次から俺の苦手なアクションシーンです……とりあえずなんとかやってみます！

## 第四話 炎と炎

11歳の少年の前に、一人の男が舞い降りた。少年は孤児院の前に立っていた。

あちこち燃え、人々の悲鳴で満ちていたエイスプラザの街に静寂が訪れた。

その男は天使のようにゆっくりと舞い降りた。

白いローブを羽織り、オレンジ色の炎の宿った刀を持っていた。

男が空中に浮かんでいる事から、鳥呀は男が魔術師である事を見抜いていた。

「ふむ、たしかにお前のようだな、トリガーロックは」

男は地面に足がつくと同時に、鳥呀の顎を指で上げた。

鳥呀はその手を払いのけ、地面を蹴る。

「お前は何なんだよ！ いきなり俺の故郷を破壊しておいて、んで俺を挑発して来て！ 何が目的なんだよ！」

鳥呀は肩で息をしながら目の前の男を見た。

輝くような銀色をした初老の男だった。

紳士的な身なりに反して、目は猛獣のようにキラキラしていた。

「……………私と勝負しろ」

初老の男が言った。

「はあ？」

「言葉の通りだ。私はお前のそのトリガーロックという力が欲しい。しかしその力が噂程強くなければ、手に入れても意味が無い。そこでお手合わせだ。私がお前を殺せば、その力は私の物」

「馬鹿なんじゃないのか!？」

鳥呀は叫んだ。

もう度胸とかそんな物を越えていた。

こいつは、何がしたいのだ。

「トリガーロックは死ぬと同時に力が消え去る! どう頑張っても俺のこの力はコピー出来ない!」

「愚か者。それは自然死の場合だけだ。トリガーロックが死んだ場合、そのトリガーロックを殺した者は、死後十分以内なら自由にその力を扱う事が出来る」

初老はにんまりと笑った。

「お手合わせ出来るかな？」

鳥呀は奥歯を噛み締めた。

「よろこんで」

初老が炎の宿る刀を構えた。



「……………あの時、私はお前に負けた。理由は二つだ。一つ、私はただの魔術師で、身体戦闘に慣れていなかった事」

鳥呀とアマテラスは対峙していた。

お互いの距離差は訳50m。

「二つ目は、私が油断していたからだ」

アマテラスが刀を構えた。

どこからともなく炎が宿り、刀がオレンジ色に光る。

鳥呀は興奮していた。

やっと。やっとこの日が来た。

復讐を果たす時が来た。

誰かに認めてもらえる時が来た。

「戦いを始める前に質問だが、私が去ったあの時から5年間、お前はギルドで何をしていたのだ？」

アマテラスが嘲笑の表情を浮かべながら尋ねた。  
鳥呀は準備体操をしながら、自信ありげに言う。

「Sランクの任務をこなして、戦いを学んでいった。んで、色々な奴と戦って、自分の強さを自分で確信した」

鳥呀は腕をまわした。  
準備万端だ。

絶対に、こいつは殺してみせる。

二人の周りに男達が結構な距離を置いて観戦していた。  
中には賭けに応じる者も居る。

全員の視線が注目する中、鳥呀が呟いた。

「お前は今日、ここで、死ぬんだよ」

アマテラスが走り出す。

戦いのゴングが鳴った。

アマテラスは燃える刀を構えたままこちらに向かって走った。  
鳥呀もアマテラスの様子を見ながら距離を縮める。

まだ間合いに入っていないというのに、アマテラスが刀をぶんと振

る。

すると刀から岩のような炎の塊が飛び出し、真っすぐに鳥呀に向かつて飛んで来た。

そう、これがアマテラスの能力だ。

炎を宿した刀から様々な火系統の魔術を発動させつつ、刀本体の切れ味を武器にする、魔法と身体戦闘の組み合わせ。

ただ炎を出現させるのには、刀を振る事が必須とされていた。

鳥呀は真っすぐに飛んでくる炎の塊を左足で地面を蹴り避けた。

左へと吹っ飛ぶ体を右足を出してバランスを整え、また走り出す。

が、炎の塊でアマテラスから目を離していた鳥呀は一瞬困惑する。

左右どこにも彼の姿が見えない。

突如、鳥呀は悪い予感を感じ、後ろへ急いで下がった。

1秒前まで彼が立っていた場所に、刀が突き刺さる。

アマテラスは鳥呀が目を離した隙に間合いに入り込み、ジャンプし、ホッピングのように縁の部分に足を乗せて鳥呀を上から突き刺そうとしたのだ。

炎をまとった刀は鳥呀ではなく草に突き刺さる。

草が燃え、あたりに焦げ臭い匂いが広がる。

が、これは鳥呀にとってチャンスだ。

アマテラスは刀の縁の上に立ってるが、落下の衝撃でバランスを崩さないように両手で刀の柄を持っている。

ということは、今のアマテラスは完全にガードの出来ない状態だ。

鳥呀は一步踏み込み、そのまま全体重を乗せたパンチをアマテラス

の顔を狙って突き出した。  
が、アマテラスは人間離れした動きで右手を柄から離し、鳥呀の拳をパシッと受け止める。

が、焦らずに鳥呀はすぐに左足の蹴りを繰り出す。  
しかしこれもアマテラスに受け止められた。

手と足を掴まれ、情けなく動きを停止する鳥呀の耳に、アマテラスの囁きが届いた。

「・・・爆ぜろ」

その瞬間、地面に突き刺さっていた刀の周りの地面から、いくつもの火柱が出現した。

鳥呀は舌打ちをしながら後ろへ飛んだ。

幸いにもアマテラスは火を逃れるために火柱が出現する直前に手を離したので、鳥呀は持ち前の瞬発力で後ろに下がれた。  
が、火柱は鳥呀の膝と腹をかすめた。

クリーム色の、戦闘用の半ズボンは焦げ、上半身の黒パーカーには火の粉がついていた。

アマテラスと距離を置いて、鳥呀は考える。

刀を振らなければ炎が出現しないと思っていたのは、こっちのミスだ。

まさか振らなくても炎を出せるとは思わなかった。

だが、ある疑問が脳に渦巻く。

ならなぜ、わざわざ炎を出すときに刀を振るんだ？

鳥呀は人差し指をガリッと噛み、冷静に考える。

あ、なるほど。

振って勢いを付けるのか。

ならなぜ勢いをつけるのか？

簡単だ、威力が増すからだ。

合点がいく。

つまりまとめると、アマテラスは刀を振らずに火系統の魔術が使えるのが、それをすると炎の威力が下がる、と。

言われてみれば、ギリギリで攻撃を受けたあの火柱も、殺傷能力はさほど高くなかった。

よし、と鳥呀は呟く。

こうなったら頭脳戦だ。

「ふん、学習したかトリガーロック」

いつのまにかアマテラスが刀を構えていた。

「それでは、そろそろお楽しみと行こうかな」

アマテラスは刀をくるくるとまわした。

炎の粒子のようなものが刀に集まり、巨大な炎刀となる。

そしてくるくると刀をまわしながら、アマテラスが言った。

「巻き込め」

火が、炎が、大きな渦となり鳥呀を襲った。

それはまるで竜巻のようだった。

地面の草を燃やし、あらゆる水分を蒸発する。

鳥呀は横に吹っ飛んで避ける。

炎の渦が拡大した。

目の前に迫ってくる……。

「まだこの程度で死んでないだろうか？」

アマテラスが笑う。

遠くにいる男達も歓声を上げた。

あたりは煙でよく見えない。

炎の渦は消え去ったが、煙はアマテラスの視界を奪つた。

その時、背後で音がした。

ザッ、という草を踏む音だ。

アマテラスは高らかに笑うと、背後をむいて刀を構えた。

そして、衝撃がアマテラスを襲った。

後ろから頭を殴られたのだ。

その強さは拳とは思えなかった。

アマテラスは吹っ飛び、地面に体を激突する。

なぜだ、どういうことだ。

音は攻撃の逆の方向からしたし、あの音はすぐ近くで発生した。

激突の衝撃で口の中を切ったようだ。

血の筋が垂れる。

あたりに漂っていた煙は、風に流されていた。

さっきまでアマテラスの立っていた場所に、鳥呀が立っていた。

作戦成功、と鳥呀は心の中で言った。

煙であたりが見えないのをいい事に、鳥呀は拾った大きめの岩をアマテラスの背後に上から投げた。

綺麗なアーチを描いて岩はアマテラスの背後に落ち、アマテラスがそっちの方向に向いた瞬間、攻撃をしたというわけだ。

しかしまあ、よく成功したなと自分でも思う。

さて、これからいたぶり殺してやると鳥呀が攻撃の体勢に入った瞬間、狂ったような笑い声があたりに響いた。

「くくく……………そういう事が……………ははは、はっはっは！ ひっ！」

腹を抱えてアマテラスが地面に転がり、笑っていた。

「こんな形で馬鹿にされたのは、生まれて初めてだ！ ひひ、ひひひ！」

鳥呀は悪い予感を感じる。

アマテラスがゆったりと起き上がり、鳥呀を睨んだ。

「お前、絶対に殺す」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7714i/>

---

トリガーロック

2010年10月21日16時40分発行